〈青森県史〉の窓 8

南部地方の虫ぼい

清野耕司
（県民生活文化課県史編さんグループ）

家々がほぼ例外なく農耕によって生計を立てていたかつての農村では、米をはじめとした農作物の収穫が最大の関心事であり、五穀豊穣・村内安全が共通の願いであった。春の初めの予祝行事（あらかじめ秋の豊作を祝う）や秋の収穫祭と並んで、農作物の生育を妨げる障害を取り除く儀礼も農村には欠かせないものであった。代表的なものは農作物に壊滅的なダメージをもたらす害虫を追い払う虫送り行事である。青森県内では津軽で虫送り、南部で虫ぼい（虫追い）といわれ、かつてはどの集落でも行われていた。

三戸郡田子町飯豊の虫ぼい

南部地方の「虫ぼい」は、旧暦の6月24日に麦殻（今は稲藁）で男女一対の人形を作り、「悪虫退散、五穀豊穣」などと書いた幡を持って、太鼓・笛・鉦などで囃しながら集落を回り、最後に村はずれに送り出す（谷に捨てたり放置したりなど）というものであった。現在では、三戸郡田子町・南部町などごく限られた地区でしか行われていない。

虫ぼいと非常に似通った行事に、疫病送りとしての「人形送り」があり、これも現在では、上北を中心にいくつかの地区で行われているに過ぎない。例えば、藁で男女一対の人形を作り、集落を一軒ずつ回り、家族の者が一人ずつ餅や煎餅に息を吹きかけ人形に刺したりつるしたりして、最後に村はずれでトシナ（注連縄）をはって、人形を立てかけるというもので、やはり旧暦の6月24日頃に行われる。この場合の人形は、病気などの災いを身代わりに背負ってもらう形代と考えられる。

この虫ぼいと人形送りは、本来別々の行事であったが、災厄を村外へ送り出すという目的が似通っていることなどによって、行事内容が混同したとも考えられる。

旧暦の6月24日という日取りについては、恐山の地蔵信仰との関連を考えてみる必要がある。この日は恐山の大祭の日（現在は月遅れの7月20日から）で、疫病や虫害をもたらす浮かばれぬ霊と作物に付く虫の霊をなぐさめる虫供養などと結びつき、この日取りが定着していったとも考えられる。実際に恐山の大祭では虫礼も配布され、各集落の参詣者によって村人たちに届けられ、各自の田畑に立てられた。

南部地方の虫ぼいの人形は、男女の性的な表現を施しているのが特徴である。作物の豊作を祈る呪術（まじない）的儀礼として人間の生殖行為を関連させた農耕儀礼は、全ての民族に共通するものとも考えられている。病気や害虫など災厄の形代であると同時に、豊穣の象徴という意味もあったのではないか。

次回は、龍や蛇の形をした形代が特徴的な津軽地方の虫送りを紹介する。